

いわて防災学教室

災害から学び、災害に備える



2008年岩手・宮城内陸地震を語り継ぐ一関市災害遺構

岩手大学農学部教授

井良沢 道也

災害遺構とは、災害の記憶を伝承させ、将来の減災へつなげることを目的として、過去に発生した災害の痕跡を保存したものである。ここでとりあげる一関市に設置された災害遺構（旧祭時大橋、市野々原被災地）は、2008年に発生した岩手・宮城内陸地震のいわば爪痕を残したものである（ここでは一関市災害遺構と呼ぶ）。

岩手・宮城内陸地震は平成20年（2008）6月14日午前8時43分頃、岩手県南部を震源として発生した。規模はマグニチュード7.2、岩手県奥州市と宮城県栗原市においては最大震度6強を観測した。人的被害をみると、17人が死亡、6人が行方不明、負傷者は448人であった。なお、死者の多くは土砂災害によるものであった。災害復旧工事に関わっていた国土交通省岩手河川国道事務所、林野庁岩手南部森林管理署、岩手県一関土木センター、同一関農林振興センター、一関市の各機関が連携して災害遺構の整備計画を策定することとした。一関市災害遺構は主なものとして、祭時地区では落橋した旧祭時大橋、祭時大橋見学通路、祭時被災地展望の丘、市野々原地区では、市野々原被災地展望広場があげられる。

岩手大学では一関市災害遺構に訪れた人々（105人）に聞き取り調査を行った。見学の感想は、「自然の脅威を感じた」という声が多く聞かれた。見学後に防災意識が高まったと回答が多かった。また、「災害遺構を次世代にまで残し保存するべきだ」との声も聞かれた。遺構を見学した人に誰に何を伝えたいかを質問したところ、伝えたい相手としては「家族・子供」が一番多かった。災害遺構は見学者に、自然災害の脅威を伝え防災意識を高めるだけではなく、見学者自身が誰かに伝えたいと思うような伝達意識も高める効果があると考えられる。遺構の見学者は岩手県や宮城県に居住している人が多く、家族と一緒に遺構を見学する人々が多かった。また遺構を見学した理由として、「たまたま立ち寄った」という回答が非常に多かった。これは、一関市災害遺構が観光地の多い道路沿いにあるためである。遺構をたまたま通りかかった際に、「あの日この地域で災害が起こったのだ」と振り返る機会が持てるとい

うことだけでも、災害を風化させないために、貴重なことだと言える。災害遺構の見学をきっかけに家族内の防災に関する会話も増えれば、防災波及効果も期待することができそうだ。防災意識の維持には継続性・持続性が大切であるため、災害遺構が持つ“見学の反復性”は貴重な存在である。

一方、一関市災害遺構の主な4カ所について、各箇所の認知度を調査したところ、祭時大橋の認知度は高かったが、他の3カ所の認知度は低い。また現場の解説パネルが「専門的すぎて分からない」という意見も見受けられた。

一関市災害遺構は、7年前の岩手・宮城内陸地震による自然の脅威や災害の教訓を次世代に伝えたいという想いで保存されている。その想いを大切に受け止めながら、わたしたちも次世代へ継承していく必要がある。今回の調査の結果、一関市災害遺構は見学者の防災意識を啓発するだけでなく、伝達意識の啓発も促すことがわかった。なお、本年、一関市内で「いわいの里ガイドの会」が一般市民を対象に研修を始め、災害遺構などの語り部育成を始めた。本災害を風化させない取り組みが期待される。



祭時大橋見学通路（地震時の地すべりで道路がうねっている様子が見える）